

## 【書評】二地居：異邦人から新住民への島内移民ルートの提案

黄雅鴻 教育部大学社会责任推進センター ポスドク研究員

この『二地居（2拠点生活）』という本を読むと、自分自身や周りの友人のことを読んでいるような気がする

1999年に修士課程に入るために花蓮に来てみると、自然豊かな花蓮をたたえて「花蓮の地は人をつなぎとめる」という言葉をよく耳にしたが、心の中では常に、そうなのだろうかと疑問に思っていた。なぜなら、「自然の豊かさ」を楽しむ時期が過ぎると、よく口を衝いて出たのは、あるいは「言うことがはばかられた」のは、「豊かな自然は退屈だ」ったからだ。周りにいるよそから来た人の何人が花蓮に「つなぎとめ」られているのだろうか。正直なところ、友人やクラスメートのなかで、最終的に花蓮に居を定めた人はそれほど多くない。花蓮と関わりを持つようになったのは、東華大学で学び、教えるようになってからだ。また、東華大学は常に周囲の友人にとって衣食を与える親のような存在である。人によっては農家や、文化活動や社会活動に参加する人、コミュニティのスタッフになることもある。花蓮との間につながりがあっても、ずっと暮らすことができない人は、私のように、花蓮と台湾北部の2つの街を行き来するのが日常となっている。

多くの人は、学業を終えた後、どうして花蓮に残るという選択をしないのか。別な問いかけをするならば、卒業後に花蓮に残る人を増やすには、どのような条件が必要なのか。

「一番住みたい街はどこですか」。『二地居』の公式ウェブサイトはトップページで問いかける。人と場所の関係をより強固なものにすることを重視する一般的なコミュニティの組織的な活動に比べ、『二地居（2拠点生活）』が提唱する「二つの場所に住み、二つの場所で働く」という新しいライフスタイルは、台湾の異なる世代に共鳴する可能性を秘めている。本書の第1部では、日本政府が、超高齢社会における介護という難題があるなか、「介護離職ゼロ」政策によって青壮年層に介護休暇を与え、故郷に暮らす高齢者の介護を理由とした青壮年層の離職をどのように防ごうとしているのかを取り上げている。日本の民間企業でも、高齢者介護のために離職を余儀なくされる労働者を支援するため、月曜から金曜までという勤務形態を緩和する動きが出てきている。また、近年、日本政府や企業では、従業員が第二の専門分野に進出することを奨励している。こうしたさまざまな文脈のもとで、現代の日本社会は、しだいに「二地居（2拠点生活）」というライフスタイルができる状態になりつつある。

日本の新しいライフスタイル「2拠点生活」は台湾にどのような示唆を与えるのか。まず、著者は2拠点生活のモデルが地方創生の戦術になると考えている。台湾は国土が狭いため、実現可能であり、多くの人たちがいなかに愛着を持っているということがある。しかし、都市部とのつながりをすぐに完全に断ち切ることはできないため、2拠点生活というライフスタイルは比較的現実的であり、そこから、また違った可能性が広がっていくこともありうる。「2拠点生活」というライフスタイルは決してすぐに実現するものではないということ認識したうえで、著者は、移動生活を行う人々は、「関係人口」、「2地点間を流動」、「2拠点生活」、「新たなふるさとへの移住」という4パターンに集約され、線的に、またはループを描く形で実現していくものとしている。

とはいえ、私が思うに、2拠点生活とは、「2つの間(in-between)」と「2つを兼ね備える」という性質が同居したライフスタイルの提案であり、「スラッシュキャリア」や「一人起業」というコンセプトによって、数多くの既存の、単一的な枠組みを打破するのと同じである。仕事と生活のバランスを取ろうとしているサンドイッチ世代や、ガイ・スタンディングが指摘するところの「不平等社会が生み出す危険な階級(プレカリアート)」にとって、間違いなく非常に示唆的でヒントになる方法である。

実際問題として、都市圏以外の地域で短期間生活することは、実現不可能な生活実践ではない。いなかや漁村、小さな島の民宿で働きながら宿と食事を提供してもらいながら、スケールの大きな旅にあこがれたり、あるいは、失敗しながら人生を試したいという理想を抱く若者がいる。この若者たちは、民宿の手伝いをしながら、短期間、旅人でもあり、まったくの旅人でもないという立場を実践することができる。こうした行為は、大きな対価を払うこともなく、また、それほど倫理的な問題を考えなくてよい選択である。これと似ているのは、多くの台湾の若者たちが憧れる、オーストラリアへワーキングホリデーである。これは、豪州のいなかの人手不足という問題と、若者たちの自分探しという夢とを、ちょうどよくマッチさせるものであり、世界を渡り歩きたいという18歳から30歳までの若者たちのアイデンティティを満たすことにもなる。

台湾では、都市部以外への進学もいなか暮らしを試すひとつの道である。地方の大学に進学することで、台湾の島内で留學生活が体験でき、澎湖、金門、馬祖で学べば小さな島での生活も体験することもできる。日々の生活の中で徐々にローカルアイデンティティをもつようになり、場合によっては地域活性化の活動に参加する原動力になることもある。例えば、2008年、花蓮での「蘇澳

～花蓮間の高速道路整備反対運動」では、そのメンバーの多くは東華大学で学ぶ花蓮以外出身の学生だったが、そのことが原理主義的な立場の村民の反発を招き、「外から来た者に花蓮の将来を決める資格があるのか」と強く批判された。花蓮は自然環境に優れているが、東華大学の卒業生は実際には仕事や暮らしのために都会に流れていく。しかし、現実的には、よそから来た人が花蓮に移住して2、30年仕事をして「花蓮の人ではない」とされることがよくある。同様の現象は、後に起きた193線拡幅反対運動や七星潭開発への反対運動でも生じている。これは、人口移動が地方発展の異質性、多様性にプラスの影響を与えることを物語っている。

上述した、働きながら宿と食事を提供してもらう人たちや、地方へ進学する学生たちは、『2拠点生活』の定義としては、「観光客以上、住民未満」の「関係人口」に位置付けられる。著者は、日本社会に対する観察から、日本における「関係人口開拓術」を10の戦略方策にまとめた。そのうちのひとつの「地域おこし協力隊」制度は、ここ数年、台湾で徐々に関心が広がり、敬意と羨望を集めてさえもいる。これは日本の総務省が2009年に始めたもので、若者たちになかへの移住を奨励する、任期3年間の隊員による人口移住計画である。3年間の任期終了後に隊員が定住するのを促進するため、日本政府は起業のため基金を強化している。また、中高年を対象にするほか、近年は日本に住む外国人にも対象を拡大している。

豪州のワーキングホリデーにしても、あるいは、日本の「介護離職ゼロ」政策や「地域おこし協力隊」制度も、政策レベルで新しい働き方の形成に向けたシステムを構築し、関係人口増加の戦略を提示する重要性を示している。そうでなければ、旅行や仕事、就学をきっかけとした個人の選択や熱意のレベルで地域とのつながりができたとしても、サポート体制に不備があれば、人口移動の有効な手立てとするには不十分である。

このため、著者は本書の第3部で「サポート体制は準備できているか」という核心的な問いを提起している。著者が提示する3つの解決策は、地方創生の当事者、公的部門、企業がそれぞれ果たしうる貢献である。地方創生の当事者同士がパートナーの関係を構築し、公的部門は民間セクターと連携して生活支援の基盤を構築すべきであり、また、企業も商品開発や働き方において都市といなかの結びつきを強めるエレメントをより多く用意すべきだと提言する。著者は、企業は従業員に職場を柔軟に選択させることができるか、と問いかけている。「もし可能ならば、パソコンを携え、住みたい場所に柔軟に移動でき、2拠点生活も可能となる」。医療、教育、雇用の「3点」をすべて満たすことができ、個人の専門性と介護への労力が場所による制約を受けないなら、2拠点

生活は都市と地方の発展の不均衡を解決する方策になるかもしれない。

『二地居』の出版から1年余りが経ち、数多くの議論や行動がなされている。「邸 Tai Dang-創生基地」は本書の出版からほどなくして、地方創生に取り組むほかのパートナーと合同で「宜駐花東」プロジェクトの説明会を開き、宜蘭、花蓮、台東との間で一步踏み込んだ関係を築くことを希望する人を募集した。5日間にわたる地方創生事業「就業体験」の試験的な滞在を通じて、宜蘭、花蓮、台東に移住する可能性を探るもので、いわば、民間セクターが自主的に実施した地域おこしプロジェクトである。このほか、2020年始めに民間の地方創生チームが自主的に発足させた「台湾地域おこし連盟」は、本書が、地方創生のサポート体制が不十分な状況において地方創生チームが提供可能な貢献について言及した手法を取り入れている。つまり、この連盟は目下、公共セクターと企業が持つ社会的な責任を果たすためのリソースを統合するために持続的に取り組んでおり、地方創生の基盤整備を行っているものとして、効果には強い期待が寄せられている。

本書は、著者のひとりである「林事務所」代表の林承毅が長年の経験をまとめたものに加え、重要な指標としての意義をも持っている。それは、本書が地方創生政策開始2年目に出版され、国家発展委員会と遠見天下文化事業グループが共同で出版したという点である。それが引き起こしたさざ波がテキストそのものにも波及し、新たな生活様式を反映させた提案は、地方創生をより身近なものにしている。政策展開を通じ、台湾の都市部といなかの間で、リソースの流れる方向性、経済モデル、ライフスタイルの選択、政治選択の面で、従来とは異なる道へと徐々に歩いていくことが期待される。

編集部推薦のウェブサイト：

[https://event.gvm.com.tw/202011\\_newplacemaking/](https://event.gvm.com.tw/202011_newplacemaking/)

<https://www.thenewslens.com/article/145966>